



ウィーン少年合唱団の本拠地、アウガルテン宮殿

## ウィーン少年合唱団

日本では「天使の歌声」と「セーラー服」でおなじみのウィーン少年合唱団。世界各地を演奏旅行する一方、ウィーンでは毎日曜日ホーフブルク王宮の礼拝堂でミサ曲を歌っている。合唱団は4つのグループに分けられていて、いかに演奏旅行が多くともそのうちひとつは必ずウィーンに残るようにローテーションが組まれているのだ。

合唱団の歴史は古く、その前身である「宮廷礼拝堂付きの少年聖歌隊」は、15世紀末にオーストリア皇帝マクシミリアン二世によってつくられた。以後、歴代の皇帝の庇護のもと、女帝マリア・テレジアの結婚式、フランツ二世の即位式など重要な式典には必ずその歌声が聞かれるという、合唱団にとって華やかな時代が続く。

第一次世界大戦で帝政が崩壊すると、合唱団は経済的なよりどころを失い、解散の危機に立たされ



おなじみのセーラー服姿

る。しかし、再興を願う人々から合唱団の管理を託されたヨージェフ・シュニット神父が、自分の財産を運営費用に充てて合唱団の立て直しをはかるという偉業をなし遂げた。

セーラー服を制服に定めたのも、ミサ曲のほかにオペレッタをレパートリーに加えたのも、彼のアイディアによるものだった。

ところでこのセーラー服だが、入団してすぐ着られるわけではない。2年の準備期間を経て、選抜試験に合格した後、に厳粛な授与式がある。団長が一人一人とかわいい握手をかわして制服を手渡しするというもので、団員が制服に誇りと愛着を持っているゆえんである。

帝政時代の少年聖歌隊には、若き日のハイドン、シューベルトの姿もあった。

ヨージェフ・ハイドンは、いたずら好きが嵩じて18才の時に宮殿を追いだされた、というエピソードが残っている。かわりにやはり声の良かった弟のミヒャエル・ハイドンが団員となった。

シューベルトは入団試験の日、あまりにも見すばらしい服で臨んで周囲の嘲笑をかったが、歌声はひととき美しく、当時の宮廷楽長アントニオ・サリエリがその



レコーディング風景

オペレッタ「カリフの鷲鳥<sup>がわよう</sup>」を上  
演



宮殿の中庭でサッカーを楽しむ

資質を見抜いて採用した、という話が伝わっている。ウイーン少年合唱団は、この偉大な先輩シュベルトのレパートリーを世界中で歌い続けている。

合唱団に入ると、全員がウイーン市のアウガルテン宮殿での寮生活をおくる。1600年代に皇帝の仮宮殿として建てられたバロック調のこの美しい宮殿は、モーツアルトやベートーヴェンをはじめ、大作曲家たちがその演奏を披露したことで有名である。

ウイーン少年合唱団がこのアウガルテン宮殿に移り住んだのは、第二次世界大戦後。当時の宮殿は爆撃でかなり破壊されていたが、その後少しずつ修理と改装が重ねられて現在の美しい姿に生まれかわった。

中には教室やベッドルームのほか、体育館やプール、サッカー場まで完備されている。

ここで、少年たちは優れた音楽教育を受けるだけでなく、一般教

科の授業を受け、規則正しい生活習慣を身につけていく。

ところで彼らがいつどのようなにして合唱団を辞めるのか、という疑問は、誰もがいたところだろう。

少年は必ず変声期を迎える。かつてシュベルトは16才、ハイドンは17才で変声期を迎えたというが、時代とともに体格の成長が早まり、現在では13才で声が変わりしてしまふ少年も多い。

しかし、心配は無用。声が変わりをしたからといってすぐにアウガルテン宮殿を立ち去る必要はない。夏休みまでは無料で宿舎に残ることができ、9月に公立学校に転校編入してからも、宮殿内の庭にある「老年年金生活者の家」とユーモアたっぷりに名づけられた住まいから、新しい学校へ通うことができるのである。ここには、合唱団に所属していた年月だけ住んでよいのだそうだ。

音楽才能にめぐまれた子供達だが、大きくなると意外にも音楽と

は違った道にすすむケースが多いという。アウガルテンでの人格教育が、どんな分野にすすんでも彼らの能力を発揮できることを目指していることの証であろう。

ただこの世界的に有名な合唱団も、入団応募者の減少という大きな危機に直面している。合唱団の規模を何とか現状に保つため、つい最近になって団付属の幼稚園が設立された。なるべく小さいうちから子供達を音楽に親しませ、その後は正団員として確保していく、という試みである。

ウイーンフィルと同じように純血を保ちながら、かつ演奏旅行に対応していきけるだけの団員数を維持していくのは、そう簡単にはいかぬような様相である。